



## CONTENTS

|                                |                |
|--------------------------------|----------------|
| ●年次報告書の刊行にあたって                 | 3              |
| ***活動報告***                     |                |
| ■国際シンポジウム                      |                |
| ジェンダーフォーラム（タイ）                 | 6              |
| ■特別講演会                         |                |
| 「近代の社会再封建化：社会構造・ジェンダー・経済」      | 18             |
| 「ジェンダーの脱植民地化を目指して」             | 24             |
| ■上映会・特別イベント                    |                |
| 資料映像上映会「女性法曹界の道を拓いた人々」         | 30             |
| 映画「少女と夏の終わり」上映会+座談会            | 33             |
| 特別イベント「『アナ雪』現象を読み解く！」          | 36             |
| ■他機関との連携・協力                    |                |
| ホームカミングデー上映会「女性法曹会の道を拓いた人々」    | 40             |
| 女性研究者研究活動支援事業キックオフシンポジウム       | 40             |
| ■研究プロジェクト成果報告                  |                |
| A「女性専門職の過去・現在・未来」              |                |
| 武田政明・吉田恵子・細野はるみ・平川景子・長沼秀明・岡山礼子 | 42             |
| B「企業における女性の活躍促進に関する調査研究」       | 牛尾奈緒美 43       |
| C「戦後ドイツにおける『公共性』概念とジェンダー」      |                |
| 出口剛司・宮本真也・水戸部由枝                | 44             |
| D「後期近代におけるジェンダー規範の変容と持続」       | 田中洋美・石田沙織・他 45 |
| E「性別二元制を攪乱する女性アスリートの新聞報道分析」    | 高峰修・田中洋美 46    |
| F「資本主義的近代化における不平等の編成」          | 宮本真也・出口剛司 48   |
| ■業績一覧（2014年度）                  |                |
| ●ジェンダーセンター運営委員業績一覧             | 50             |
| ●ジェンダーセンター運営委員会会議録             | 53             |
| ●ジェンダーセンター運営委員                 | 54             |
| ●編集後記                          | 55             |





## 年次報告書の刊行にあたって

情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの5年目が閉じようとしております。

発足以来、本ジェンダーセンターでは様々な活動を展開してまいりましたが、これもひとえに学部内外の運営委員の先生方、学部事務室をはじめ、関係の皆様方のご尽力の結果であり、また、この活動に関心を持たれ、行事にご参加下さる皆様のご支援のおかげと存じます。深く感謝申し上げます。

2014年度の活動を振り返ってみますと、前半には、まず明治大学女子部の歴史的意義を記録した映像の完成に次いで、上映会を催しました。これは5月末に1回と、卒業生の皆様にも見ていただくために秋のホームカミングデーに1回行いました。7月にはネッケル先生・コンネル先生をお招きしての二つの特別講演会・ワークショップを実施いたしました。日程が近かったのですが、それぞれにこの分野での先端に行く外国の研究者をお招きしての充実した催しで、大いに刺激を受けることができました。

年度の後半には、本センターと交流のあるタイとインドの大学との共同のジェンダーフォーラムがタイのシーナカリンウィロート大学で開催され、3名の運営委員、大学院生1名、学部学生1名の5名で参加してきました。今回は特に学生の発表の機会があり、うち一つは賞を受けるなど、学生の活躍を特記できましょう。また、年末から年始にかけて、映画を巡っての二つの学生を対象としたイベントを実施しましたが、これらを通して、これまで課題であった、ジェンダーセンターの活動に学生を巻き込むということが大いに進展したのは嬉しいことでした。本年度中の各種イベントは、一連の学部創設10周年記念行事として展開されました。

そして、ジェンダーセンターの活動の拠点としてのセンター室が、アカデミーコモンからリバティータワーの21階に移転し、一層広く使いやすくなりました。当初、研究棟の小さい部屋からスタートしたセンター室もかなり充実してきました。外部の方々にも開いていきたいと考えておりますので、どうぞ十分に活用していただきたいと思います。

さらには、今年度、明治大学が文部科学省の「女性研究者研究活動支援事業」に採択され、大学としても男女共同参画推進体制が急速に進展してきております。本ジェンダーセンターは明治大学内で早くからこの分野の活動をしてきた組織としてこの事業に協力し、今後も連携して双方の事業を進めていくこととなります。

今後とも、ジェンダーセンターの事業をさらに実りあるものとして充実させていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2015年2月19日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長  
細野はるみ







# 国際シンポジウム





2014 年度

ジェンダーフォーラム (タイ)

学際的シンポジウム：「社会・文化の多様性のレンズを通しての知の構築」

The Interdisciplinary Symposium: Knowledge Construction through the Lens of Social and Cultural Diversity

【主催】 シーナカリンウィロート大学大学院 (タイ・バンコク)  
The Graduate School of Srinakharinwirot University

【学会開催】 2014 年 11 月 3～5 日

【場所】 Professor Saroj Bausri Innovation Building

【日程】

11 月 1 日 シーナカリンウィロート大学 (タイ) に到着  
同大学国際課長プラニー氏と面会

11 月 2 日 シーナカリンウィロート大学大学院長ソムチャイ准教授・公共政策経済学部チョンプヌツ准教授と会談

11 月 3 日 シーナカリンウィロート大学大学院主催国際学会開会  
同レセプション (同大学院創設 40 周年記念行事) 出席

11 月 4 日 シーナカリンウィロート大学大学院主催国際学会参加  
口頭発表・ポスター発表参加  
会議参加者・大学院関係者との打ち合わせ

11 月 5 日 閉会后、日本帰国



## 報告：細野はるみ（情報コミュニケーション学部教授）

タイのシーナカリンウィロート大学との大学間協定に基づいて本学部は研究や留学生交流を積み重ねてきており、ジェンダーセンターでも研究交流の機会を設けてきた。そこにインドのクマウン大学が加わって3大学間での研究交流が開始し、その手始めに、交流の核としてのジェンダーフォーラムが企画され、2013年3月にはインド・ウッタラカンド州ナイニタルのクマウン大学で初回のフォーラム開催の運びとなった。（以上、2011・2013年度年次報告書参照）次いで2014年11月にはタイ・バンコクのシーナカリンウィロート大学で第2回目のジェンダーフォーラムが催された。

今回のフォーラムは、シーナカリンウィロート大学の大学院創設40周年記念行事と、同大学の卒業生であるタイ王室のシリントン王女の同大学院での博士学位取得の記念講演という、同大学にとって非常に重要な行事の一部として開催され、行事の全体では10ヶ国以上からの参加があった。ジェンダーセンターからは、教員3名、大学院生・学部生各1名の計5名で参加した。なお、松岡宗嗣さんは政治経済学部の2年生である。

今回の国際学会のタイトルは「学際的シンポジウム：『社会・文化の多様性のレンズを通しての知の構築』」であり、まさに多様な在り方への理解を深めるべく構成されていた。学会2日目の午前の開会式で、後述する国際シンポジウムのベストペーパー賞の贈呈式があり、その後の基調演説・特別講義に次いで、午後はパネルディスカッションの後、3つの分科会にわかれての研究発表があった。情報コミュニケーション学部のジェンダーセンターからのメンバーは、「ジェンダーアイデンティティ」の分科会に参加した。他の2つは教育と経済に関する分野であった。

ジェンダーセンターメンバーの口頭発表は以下の2件であった。

- 牛尾奈緒美「組織の情報化と女性の活躍促進—日本の就労環境におけるジェンダ



ポスター発表会場にて



ポスター発表(田中・石田)

一分析で、いずれも情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの特徴をよく表していたと思う。

その他の発表者からは、インド・クマウン大のジョシ博士によるヒマラヤ地域での伝統的ジェンダー観と資源保護の問題、タイの男女間の賃金格差、タイの若年層の妊娠問題などが挙げられていた。それぞれの国や社会固有の問題がジェンダーを通して浮き彫りになり、日本から提示された、先進国固有とっていい問題のあり方について改めて考えさせられた。

一・ステレオタイプを超えて」

● 田中洋美・松岡宗嗣「デジタル時代における性の階層化—日本の出会い系SNSとその利用者の事例をめぐって」

また、ポスターでの発表は以下の1件である。

● 田中洋美・石田沙織「腐女子のマンガ消費—ジェンダーの視点から考える革新性と社会変化の可能性」

ジェンダーセンターからの発表はいずれも好評で、特に学生の発表は今後の成果が期待されるとして大いに激励された。田中先生と松岡宗嗣さんのものはソーシャルメディアを通してのゲイのコミュニティの出会い系サイトについて、田中先生と石田さんのポスター発表はマンガを材料としたメディアのジェンダー



ベストペーパー賞を受賞





今回の発表で提出されたフルペーパー全 23 本のうち、6 本が査読付き雑誌に選抜されて優先的に投稿が認められた。うち 3 本が当ジェンダーセンターからのものであった。また、ポスター発表はベストペーパー賞を受賞した。



ベストペーパー賞の表彰式の様子

国際学会の前  
後には、両大学  
との交流の更な

る促進のための協議等を行い、今後の継続的交流を確認した。シーナカリンウィロート大学大学院長ソムチャイ准教授を訪問し、現在までの交流の成果を認め合うとともに、これまで以上の交流を進めることで合意した。インド・クマウン大学との交流については、今回 1 人で参加していたディヴィジャ・ジョシ准教授を通して話し合った。

次回、第 3 回のジェンダーフォーラムを 2015 年度 11 月頃を目途に明治大学で開催することを提案した。その際、法科大学院ジェンダー法センターの辻村みよ子教授にも協力を仰ぐことで了承を得ている。また、明治大学の「スーパーグローバル大学創成支援事業」や「女性研究者研究活動支援事業」などとも緊密な連携を取って計画を進めていきたい。また、クマウン大学のジョシ准教授からは、2016 年度のジェンダーフォーラムをインドで開催したいとの申し出があった。



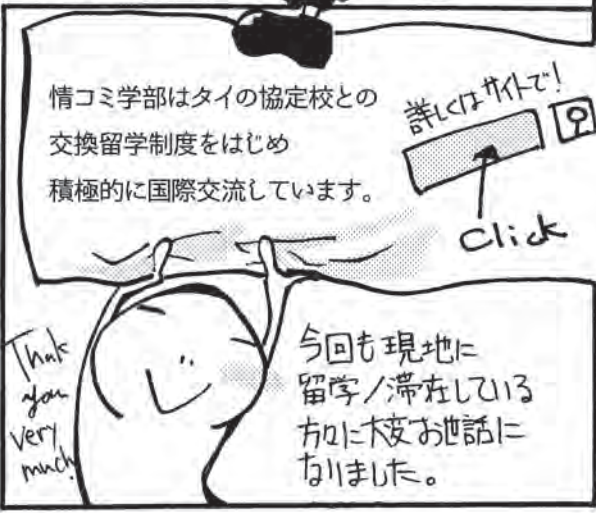
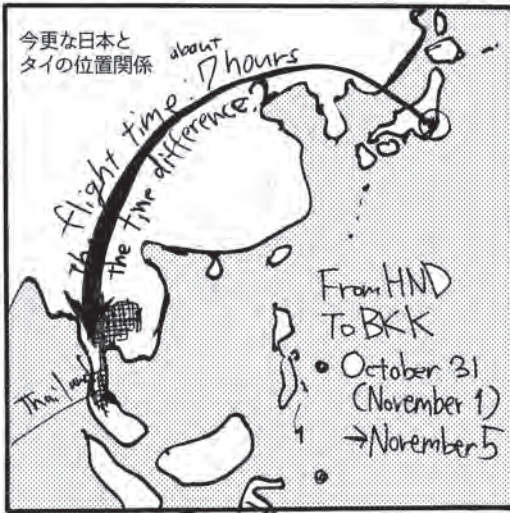
# タイ道中記 2014

何の捻りもないタイトル 石田沙織

2014年11月1日～11月5日にかけて  
タイのシーナカリンウィロート大学で行われた  
学際的シンポジウムに  
情報コミュニケーション学部  
ジェンダーセンターメンバーの一人として  
参加してきました。



※報告者は一おたくとして日々研究したりおたくしたり研究おたくして過ごす者です。  
この報告書は細野はるみ先生の報告書の裏面もといB面として作成しております。  
ので大分軽めの仕上がります





腐女子 (fu-joshi):

原作品中の男性同士の関係を独自に  
恋愛・性愛関係として読み替え、時に  
二次創作活動等を行う女性のこと。

近年では男性同士の恋愛関係を描いた作品を  
嗜好する女性を指すことが多い。

男性の場合は「腐男子」と呼ばれる。



2013~最新の  
トレンドを独断で  
話めこんだ3枚。

そもそもタイの人々は腐女子を、その言葉で表される  
謎々のご存知なのだろうか……海外では  
スラッシュとか腐女とかいう形で知られていると  
いえ……っていうかタイでこういう文化の需要あるの  
だってわざわざそんな二次元の関係性は何を見出す  
というのかだってタイって言ったら

# 閑話休題

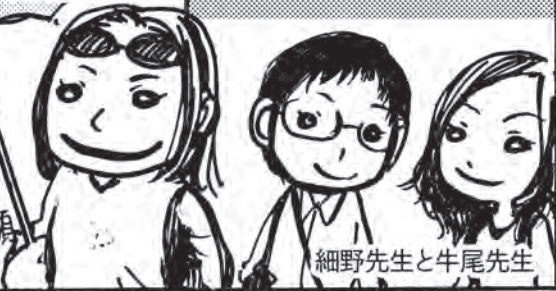
まじか!

尾の飛行機

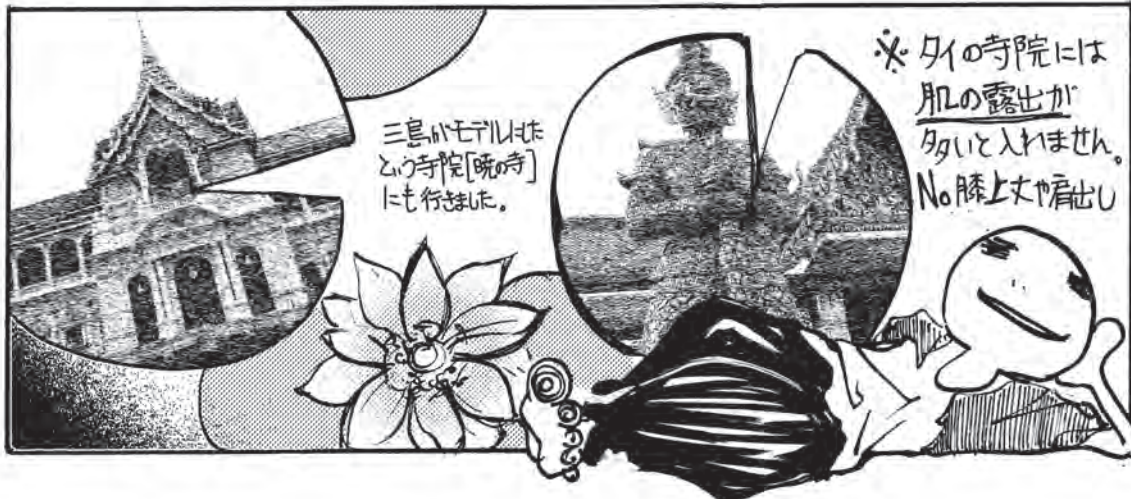


国際課課長プランニー氏との  
会談後にタイ市内視察

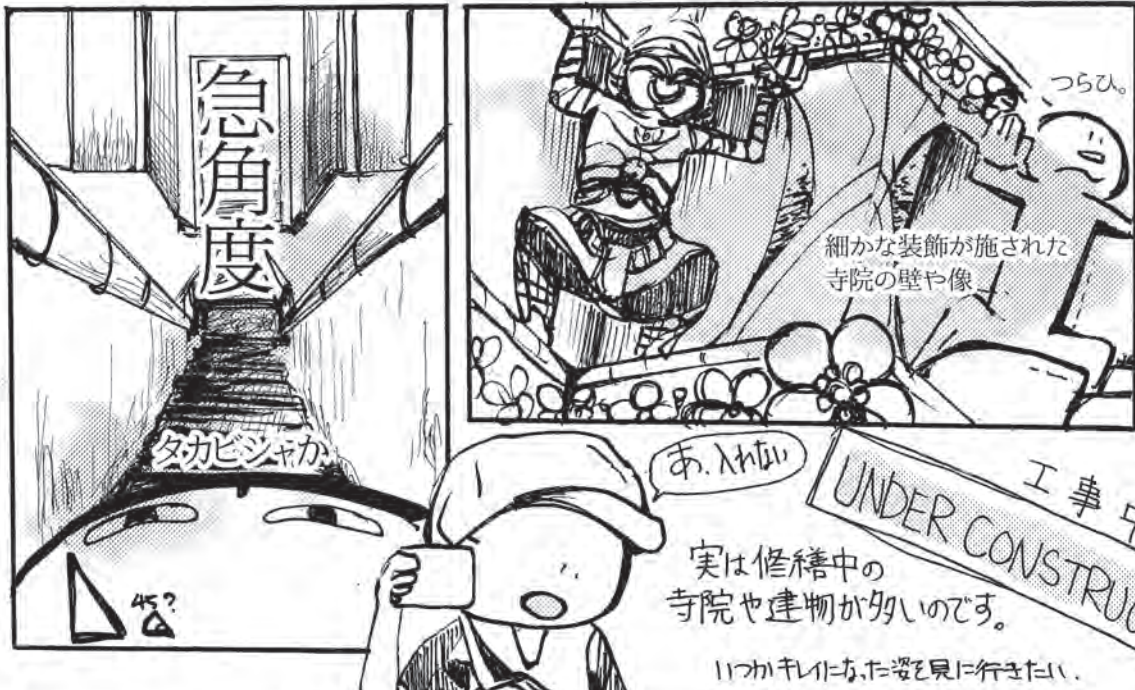
- 11月でも暑い
- 日差しは強い
- スクールも頻繁
- ＝年と上着類



細野先生と牛尾先生



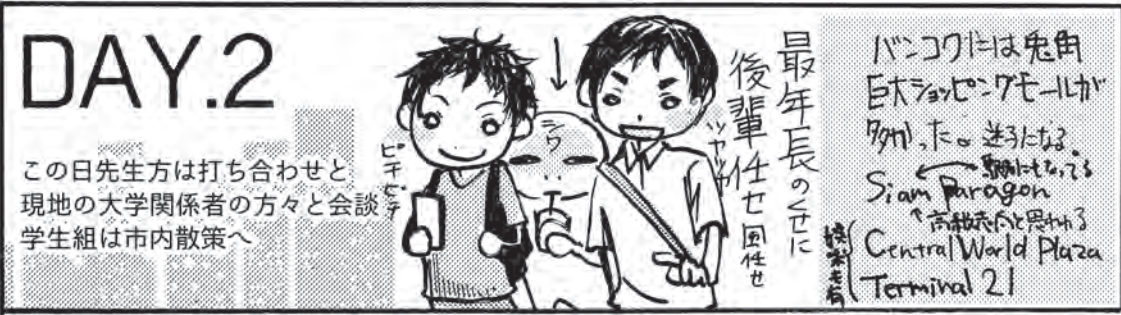




文化財やら建築物やはら修繕や維持等の技術を持つ人々を育てることも大事なわけですが日本もまた後継者問題が……  
刀女子は頑張って各博物館や資料館のグッズをですね……

あ、んたか  
実は修繕中の寺院や建物が多いのです。  
いつかキレイな、たてを是非に見に行きたい。

DAY.1



DAY.2

この日先生方は打ち合わせと現地の大学関係者の方々と会談  
学生組は市内散策へ

目取年長のコメント  
後輩任せ国任せ  
バンコクには鬼角巨大ショッピングモールが  
多し、た。送りに  
Siam Paragon  
↑高級系は思われる  
Central World Plaza  
Terminal 2!



バンコクは果物が美味しくてですね  
スムージーはどの果物でもあたり…  
スイカもマンゴーも何もかも…



ここで気になるサブカル。漫画、いや、ポイズラブ的なものはあるかと思いきや、両方ちっともなかったわけで…輸入漫画(ジャ○プ作品など)もあまりなかったのは意外でした。場所によるのかもですね。

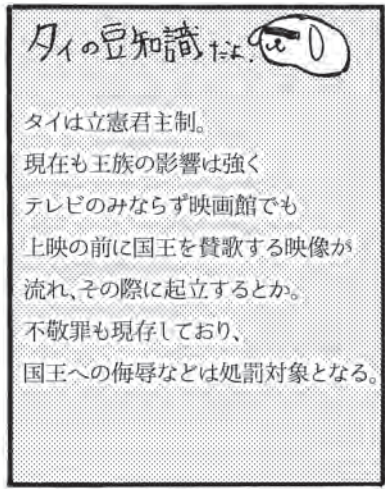


コンビニや本屋に並ぶマンガ雑誌表紙・中身は、な。11-11-11-11。女子は説かいはゆるTLはあかんとどう見てもイクメンイラスト…

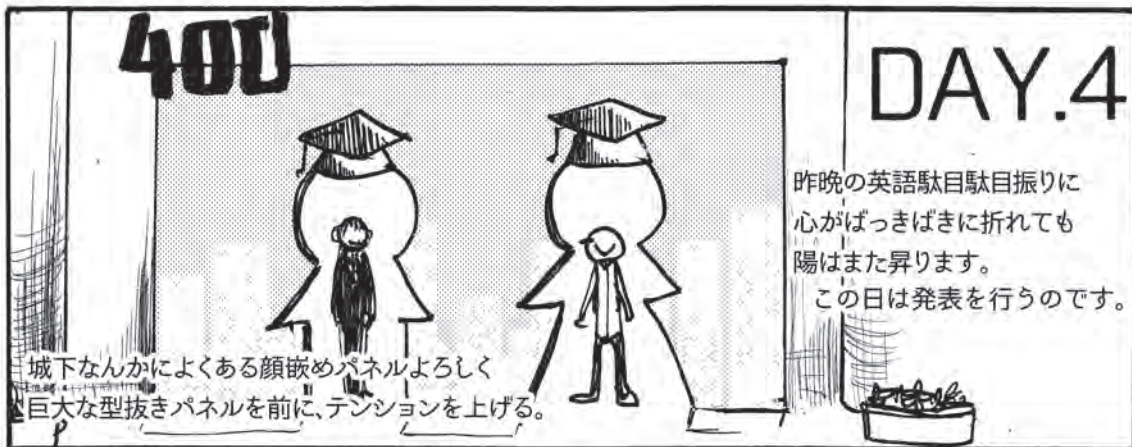
Change 6:00  
5:39  
国王替歌

そして定刻になるとどの局でも国歌が流れるテレビ





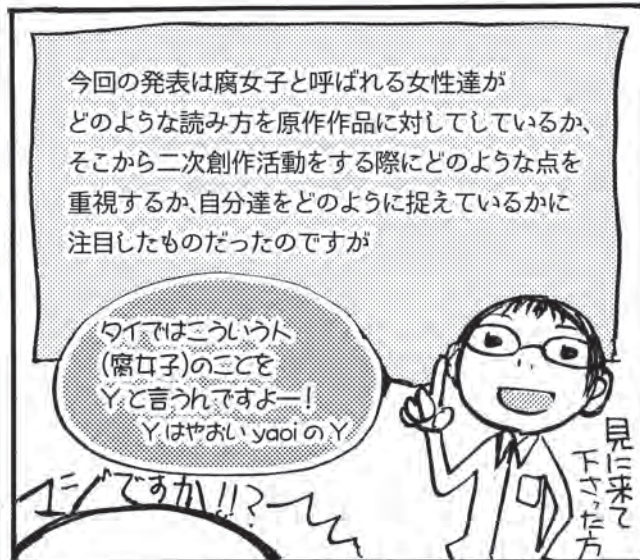




そして受賞したペーパーを元に作成したポスターがこちら



実物はジェンダーセンターにあります。











# 特別講演会





明治大学情報コミュニケーション学部創設 10 周年記念行事

ジェンダーセンター特別講演会

「近代社会の再封建化：社会構造・ジェンダー・経済」

Die Refeudalisierung der modernen Gesellschaft: Sozialstruktur, Gender, Ökonomie

【主催】情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター,  
情報コミュニケーション学部

【共催】明治大学現代社会研究所、日本社会学理論学会、明治大学専任教授連合会

【日時】2014年7月18日（金）17:30～20:00

【会場】明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 1F グローバルホール

【参加人数】55名

【コーディネーター】宮本真也（明治大学情報コミュニケーション学部准教授，出口剛司（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）【通訳】三島憲一（大阪大学名誉教授）

【講師】ジークハルト・ネッケル教授

ジークハルト・ネッケル教授は、ビーレフェルト大学、ベルリン自由大学で社会学、法学、哲学などを学び、1997年にドイツ連邦共和国ジークゲン大学の社会学及び経験的社会調査の教授に就任した。その後、ヴッパータール大学、ギーセン大学、ウィーン大学教授を経て、2011/12年冬学期から、ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン大学社会学研究科教授を勤める。また、2004年以降は、フランクフルト社会研究所の年報である『ヴェスト・エンドー新社会研究誌』の編集にも携わっている。ネッケル教授の主な研究テーマは、社会的不平等の象徴的秩序、経済的なものの社会学、文化社会学、感情社会学、政治社会学である。方法として彼は、知識社会学やエスノグラフィといった手法を取っている。2011年にゲーテ大学に招聘されて以来、ネッケル教授は社会学研究科と社会研究所の二つの研究組織において精力的に活動を行っている。ホルクハイマー、ベンヤミン、アドルノ、フロム、マルクーゼに代表される、いわゆるフランクフルト学派の批判理論が形成された場所で、彼が現在目指しているのは、批判的社会学の構築と発展である。本特別講演会のテーマである「近代社会の再封建化」のテーゼは、この課題において重要な鍵をなしている。

主な業績：Neckel, Sighard 2010: *Kapitalistischer Realismus. Von der Kunstaktion zur Gesellschaftskritik*. Frankfurt a. M. und New York: Campus. /Neckel, Sighard 2008: *Flucht nach vorn. Die Erfolgskultur der Marktgesellschaft*, Frankfurt a. M. und New York: Campus. /Neckel, Sighard und Hans-Georg Soeffner (Hg.) 2008: *Mittendrin im Abseits. Ethnische Gruppenbeziehungen im lokalen Kontext*. Wiesbaden: VS Verlag. /Neckel, Sighard 2000 [1993]: *Die Macht der Unterscheidung. Essays zur Kulturosoziologie der modernen Gesellschaft*. Frankfurt a. M. und New York: Campus.

Neckel, Sighard 1991: *Status und Scham. Zur symbolischen Reproduktion sozialer Ungleichheit*, Frankfurt a. M. und New York: Campus (法政大学出版局から『地位と恥辱—社会的不平等の象徴的再生産』(岡原正之訳、1999年)として出版されている)。





報告：宮本真也（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

2015年になってT・ピケティと彼の著書である『21世紀の資本』が話題となり、各種メディアでも頻りに現代の資本主義社会と不平等、そして再分配の問題がアベノミクスとの関係から言及されている。とはいうものの、この問題設定はピケティに独自のものではないことは、本特別講演でジークハルト・ネッケル教授が選んだテーマからも明らかである。今回、世界社会学会議横浜大会をきっかけに来日したネッケル教授にとって、資本主義的近代化という運



動そのものと、そ

ジークハルト・ネッケル氏（右）

こに生きる人びと、特にグローバル・エリートたちの生態は、目下の重要な関心事である。そして、批判理論の伝統を継いで批判的社会学を構想するうえでも不可避の問題なのである。以下、ネッケル教授の講演内容を要約したい。

金融市場資本主義は、欧州諸国を巨大な金融危機および債務危機に引きずり込んだ。それ以降、金融市場および信用市場での投機に対する公共圏での批判に賛意が集まっている。国家の破局的負債で民間の投機が儲かること、金融市場の富の崩壊およびそれと同時に起きている社会の貧困、社会的不平等の激化、こうした現状への批判が向かうところは、同じなのである。つまり、現代資本主義は、もう過去のこととされていた封建的な諸構造、身分制的特権、さらには上層貴族階層の時代へと現代社会を引き戻そうとしている、ということである。

【ポスト・デモクラシーと再封建化】 金融市場資本主義は、実際には富裕で特別待遇を受ける人々から成るニュー封建制へとわれわれの世界を逆戻りさせている、というのが公共圏での批判である。社会科学として、この批判を展開したのは、英国の政治学者C・クラウチである。「ポスト・デモクラシーの到来」というテーゼを立てて彼は、デモクラシーの過程が、拋物線的な発展の終点に到達していると論じている。この拋物線のはじまりに



は、同権に依拠した参加を求める闘争があり、その頂点が組織された福祉国家であり、その下降には「民主シーの実質の喪失」が位置しているという。「民主シーの生活曲線」のこうした下降で重要な役割を演じているのは、経済制度としての市場である。そして、この市場の規則が、政治動向をより強く決定するのである。ポスト・民主シーにあつてはまるで経済市場であるかのように、政党は票のために市民の歓心を奪い合い、市民たちの側は政党に対して顧客のように振る舞う。この「政治的コミュニケーションの退廃」に応じて社会過程においては、制御不能な私的権力が増大し、同時に、それ以外の一般国民は断片化している。



る。グローバルな経済エリートは彼らの私的な経済的利益によって、国家のような政治的共同体の諸制度に影響力を及ぼす。反対に、大部分の社会集団にあつては、参加権が削り取られ、政治的には無力となり、経済的な不安定さが広がっているのである。

ポスト・民主シーに関するこの分析は他方で、驚くべきことに、50年前に J・ハーバーマスが『公共性の構造転換』で展開した社会批判の概念との近さを示しつつも、いかなる理論的なつながりもない。当時ハーバーマスは「再封建化」という概念をもちいて、公共の議論の場を例にしながら、公共圏の基礎的なもろもろの制度の変容とともに、かつての市民的なコミュニケーション形式が逆向きの変容を蒙ったことを論じた。その分析の中心にあるのは、社会のさまざまな領域が、商業化と政治的正統性の調達という二つの圧力を受けてプライベート化して行く様子であった。そこで市民的公共圏は、経済的利益とメディアによる政治的影響力行使のための手段になってしまっている。それゆえ、ハーバーマスによると、市民社会の成立のために不可欠だった公的問題と私人の利害という領域の区別が消失している。それは、クラウチが現在、経済エリートは政治的空間と国家の諸制度を利益重視の企業に類したものにってしまった、と指摘している事態に匹敵するほど重要なことである。

【女性の家事労働の再封建化】 現代の社会分析においては、「再封建化」という考え方





を目にすることは少ない。例えば、多くは女性から成る家事労働者はグローバルに移動して、グローバル化した中心的都市の多くで家事労働者として働いている。こうした女性労働者のグローバルな移動に関する研究では、その分野で契約の平等性がまったく欠如していることが分かる。そこではミグレーション労働者の家事労働に「再封建化」ではないかという疑いが生じてくるのである。この考え方によれば、グローバル化した労働市場で家事労働を提供しようと動く人々は、まったくの個人的従属状況にあり、かつての市民的＝近代的な区別、すなわち公的と私的の区別、仕事の場所と住むところの区別、賃金と個人的好意の区別などが無意味になっている。平行して、そこには搾取環境がある。またこうした女性たちが労働する諸国に不法滞在していない場合でも、滞在権はさまざまに限定されている。それゆえそこでの労働は往々にして雇用者の私的空間でもなされている。特にグローバル・ケア・チェーンと言われる巨大な労働分野においては、女性たちは豊かな国々で介護労働や家事労働に従事している。そして、権利の配分という点では、現代社会における歴史的進歩の以前の時代状況に退化し、女性たちはニュー封建制ともいべき従属関係に陥っているのである。



**【社会構造の再封建化】** 最後に、現代の社会構造をめぐる議論で「再封建化」の概念が用いられるのは、どういう家族に由来するのか、また今日の下層階級と上層階級の社会的地位がどう遺伝されていくのかについてである。例えばドイツで高級サラリーマンの子供たちの社会的上昇の可能性を未熟練労働者の子供たちのそれと比較してみると、前者は、企業で上の方の地位に上がって行くチャンスが後者に対し40倍も高い。世界的なオキュパイ・ウォール・ストリート運動のキャッチフレーズだった「私たちは99%だ」という表現ですら、きれいごとに過ぎないのである。資本主義的市場経済の運動規則では、もはや物質的分配のこれほどの不平等は説明できない。グローバルな労働市場での受容と供給のメカニズムだけが収入配分の度合いを決めるものなら、現在における労働市場で最良の資格と能力を供給できる人々が、富の増大から最大の利益を得ておかしくない。だが、実際にはそれに代って、高度な能力を持った知的労働者であっても非常にしばしば残りの99%に属している。

こうした分配秩序のもとで、富める寡占支配層が市場の幸運からではなく、金融商品の所有と、それのもたらす権力のみによって利益を得て、結果として市民的な競争秩序はもはや言い訳にもならない。再封建化とはしたがって、両極分解した二つの社会グループのあいだの地位をめぐる競争もなく、両グループとも比較不能な生活状況へと閉じこもることになる事態である。つまり身分制的に硬直した静的な社会構造のことである。その点では、モダンな社会に特徴的なダイナミックな社会的モビリティ（流動性）というプロセス



の正反対である。

【近代化の逆説】 この点で理論的に展望を開くためには、再封建化とポスト・デモクラシーが生み出される運動の様態を観察する必要がある。資本主義的近代化は自らのうちに自らの進行と反対の動きを宿しているかに見える。つまり、「再封建化」とは、歴史的に過去の時代が再来することでも、大昔の時代への逆行でもない。特に重要なのは、再封建


 明治大学情報コミュニケーション学部創設 10 周年記念行事  
 明治大学情報コミュニケーション学部  
 ジェンダーセンター特別講演会  
 「近代社会の再封建化：社会構造・ジェンダー・経済」
 



● お問い合わせ先・詳細 ●  
 明治大学情報コミュニケーション学部  
 ジェンダーセンター  
<http://www.mcu.ac.jp/info/comm/gender/>

日時 ● 2014 年 7 月 18 日 (金)  
 17:30 (開演) ~ (開場 17:00)  
 会場 ● 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 1F  
 グローバルホール  
 言語 ● ドイツ語 (通訳：三島憲一 大阪大学名誉教授)

主催 ● 明治大学情報コミュニケーション学部、情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
 共催 ● 明治大学現代社会研究所、日本社会学理論学会ほか (以上、6月10日現在)

● 会場へのアクセス ●  
 ■ JR 中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線/御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分  
 ■ 東京メトロ千代田線/新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分  
 ■ 都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線/神保町駅 下車徒歩 5 分

化はある特定状態のことではなく、あるプロセスを指すということである。つまり、一定の閾値に至って逆転現象が起きること、つまり社会の諸制度が、それが歴史的に発生したときの特徴だった規範的特性を失ってしまうというプロセスである。近代化の進捗につれて社会の機能システムがかつてその発生の理由となった市民的な性格を失い得るということでもある。再封建化とはそれゆえ、資本主義と市民社会における逆説的近代化をさすカテゴリーなのであり、市民的社会秩序のもろもろの基準から離反するように仕向けるダイナミズムのことである。再封建化という分析モデルには、社会学的に見て別々の時間地平が絡まり合っている。つまり、新しい事態が

単に一方的方向を持った近代化の帰結として生じるのではない。むしろ、これまで知られていなかった社会変動が、経済と社会における従来の社会秩序のパターンを新たなかたちで実現させることで、古いものが新しく生まれてくるのである。今日、再封建化においては、経済を金融市場資本主義という構造へと近代化させたおなじ社会的プロセスが、収入、権力、社会的承認[名声や評判]の分配に関する社会形式において、元来は近代以前にあった社会秩序のパターンをふたたび顕在化させている。富の巨大な増大を約束してくれるそのおなじ経済的發展プロセスが結果として、ますます多くの人々がこうした富から排除されるという帰結を産み出している。

【現代社会の再封建化】 ポスト・デモクラシーにおけるデモクラシーのさまざまな制度の空洞化を論じる場合であれ、あるいは、現代の金融市場における経済的なニュー封建



制について論じる場合であれ、社会変動の考察にとって、資本主義的近代の「再封建化」という分析資格は、社会発展のパラドキシカルなモデルとして多くの点で有効である。

以上の分析にしたがうと、今日の社会秩序において再封建化のプロセスは少なくとも次の四つの次元に認めることができる。第一は、社会構造および社会的不平等の変化に関するものである。調整不能な社会的状況という両極化のメルクマールに、また出自が身分制的に固定化されてきていることに、封建化の明白な徴候を見ることができる。第二は、経済プロセスの組織化および金融市場において支配的な経済的最上層グループのニュー封建制的なステータスに関してである。第三には規範的側面、つまり、価値の再封建化と金融市場資本主義の正統化の秩序に関してである。これはその核心においては能力原理が、能力と無縁な、相続された位置や財産や所有証券によって取って替わられることであり、また名声や承認の再封建化である。ここでは能力原理・努力原理が共有され、要求されてはいるものの、実際には社会における自らの地位や階層を高めるには、それほど効力を持ってはいないという意味で空洞化してしまっているのである。第四には福祉国家の再封建化である。これによって国による社会政策は資金援助というかたちで再民間化され、社会政策を受ける市民の権利は、民間の慈善事業に依存するかたちへと変貌してしまうのである。

経済と社会構造、価値および能力主義・成果主義、国家の諸制度および社会政策、こうしたいっさいが再封建化しているわけであるが、それによって現代資本主義の組織原則や文化がそのかつての規範的基礎からいかに切り離されてしまったかが分かる。資本主義と市民性の歴史的結びつきは21世紀において終結したように見える。資本主義と市民社会はもはや相互依存関係にはなく、むしろ対立する。この逆説的な帰結は市民性なき現代資本主義の成立である。おそらくこの非市民的なありようこそ、21世紀において、資本主義がグローバルな勝利の道を進み始めた文化的前提なのである。

講演ののちには、資本主義に対するネッケル教授個人の理想化の疑惑、理想的な市民的公共圏の今後の可能性、特にジェンダーとの関連でEU内の労働市場でのケア労働などについても質問が出された。また、日本における貧富の差、格差社会のあり方などにも言及され、資本主義的近代における「再封建化」テーゼの有効性、普遍性について、議論が及んだ。質疑応答は予定時間を越えて行われ、ネッケル教授にはそのつど学術的に示唆に富む回答をいただいた。

ネッケル教授の準備段階から当日までの誠実で丁寧なご対応と、三島憲一大阪大学名誉教授のまさに職人芸というべき通訳・司会がなければ、本講演会はこれほど充実したものとはなりえなかつただろう。ここに記して深く感謝の意を表したい。



明治大学情報コミュニケーション学部創設 10 周年記念行事

ジェンダーセンター特別講演会

**「ジェンダーの脱植民地化を目指して**

**—世界規模で考える男性性、女性性、ジェンダー関係—**

**Decolonising gender: understanding masculinities, femininities and gender relations on world scale**

【主催】情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター,  
情報コミュニケーション学部

【後援】国際ジェンダー学会、ジェンダー史学会、日本スポーツとジェンダー学会

【協力】明治大学セクシュアルマイノリティサークル Arco Iris

【日時】2014 年 7 月 21 日（月）17 時～19 時 30 分

【会場】明治大学駿河台キャンパス リバティタワー 1 階 リバティホール

【参加人数】148 名

【コーディネーター】田中洋美（情報コミュニケーション学部准教授）,  
高峰修（政経学部准教授）

**【講演者】レイウィン・コンネル教授（シドニー大学）**

オーストラリアを代表する社会学者・ジェンダー研究者。著書は 18 ヶ国語に翻訳され、国際的に最も知られるジェンダー研究者のひとりである。近著に、欧米を中心に形成されてきた近代社会科学を批判的に検討した『Southern Theory』（2007 年）、ジェンダー研究の優れた入門書として版を重ねている『Gender: In World Perspective』（2015 年、初版は『ジェンダー学の最前線』として邦訳が世界思想社より刊行）、社会科学と政治について論じた『Confronting Equality』（2009 年）がある。その他の主要著書に『Masculinities』、『Schools & Social Justice』、『Ruling Class Ruling Culture』、『Gender & Power』（邦訳『ジェンダーと権力』三交社）、『Making the Difference』等がある。



**報告：田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）**

レイウィン・コンネル教授は、今日のジェンダー研究において最も著名な研究者のひとりである。とりわけ社会学的なジェンダー理論の形成に大きく寄与し、今日のジェンダー研究において主要概念となっているジェンダー秩序や覇権的マスキュリニティといった用語の普及に大きな役割を果たした人物である。またオーストラリア国内においては労働運動にも積極的に参加してきた「理論と実践」の人でもある。

コンネル教授の研究は多岐に及ぶが、理論的には次の3テーマについての論考が知られている。ジェンダー関係構造、複数の男性性（マスキュリニティ）、「知」の生産である。このたびの講演会では、氏が近年特に興味を持って取り組んでおられる3つ目のテーマを取り上げ、ジェンダーに関する「知」をめぐる諸問題について講演いただいた。

「知」とは、端的にいえば、我々が知っていることを指す。自らが知っていることを我々はいかにして知るようになったのか、またそれは誰によりいかにして作られたのか、という問い答えることは、知の形成における権力関係を問うことに他ならない。人類史において科学ないし学術の世界における「知」の形成には長らく女性が関わってこなかった。この

ことに気づき、問題化したのがフェミニストたちであった。このような「知」のあり方をめぐるジェンダー問題に介入するという意味においてはジェンダー研究の登場とその後の展開は革命的であった。しかし、こうした革命は限定付きのものとなっている。なぜなら現在、ジェンダー研究においてもまた同様の問題が存在しているからである。ジェンダーに関する研究における知の生産には北米や西欧といった「北」の圧倒的優位が認められる。このことを批判的に論じることが、本講演会の目的であった。

コンネル教授は、ジェンダー研究を地球的視点から眺めると理論形成の「北」、データ収集の「南」という分業が見られることを指摘した（大まかに「北」とは北米や西欧を指し、「南」とはそれ以外を指す）。このような分業においては、「北」で生み出される理論と「北」の言語（英語）の圧倒的優位の下、「南」について集められたデータは北の理論に当てはめて論じられ、それにより生み出された「知」というものは英語という言語を通して拡がる



**レイウィン・コンネル氏**



というパターンがある。これはジェンダー研究に限ったことではないが、コンネル教授は西アフリカの哲学者 Paulin J. Hountondji の研究を参照しながらジェンダー研究に焦点を当てこの問題について論じた。

ジェンダー知の形成にみられるこのような構造的問題が認識されるようになった背景には、「南」にいる研究者 や欧米諸国における「南」出身の研究者 がこうした問題について



論じ始め、それが注目されるようになったことが挙げられる。

とはいうものの、ジェンダーに関する「知」はいまも往々にして上記のような不均衡な南北関係を軸に産み出されている。

コンネル教授は講演で我々に課された課題として次の二点を挙げた。

第一に、我々の使っているジェンダーに関する理論や概念の持つ歴史性、とりわけ過去500年もの歴史において形成された権力関係やジェンダー関係が孕んでいる植民地性との関連性について認識することである。例えば、コンネル教授は、過去の植民地主義が植民地化された地域のジェンダー関係の形成に大きな影響を与えたことに触れるとともに、今日的な植民地主義としてグローバルな資本主義を捉え、ある地域でのジェンダー問題を理解するには、例えば多国籍企業やトランスナショナルエリート（スクレア）による世界各地の人的資源の管理といったような、トランスナショナルな社会過程や実践の把握が必要であると唱えた。

第二に、「南」の経験を踏まえてジェンダー研究のアジェンダを再設定することである。例えばジェンダー暴力について、ヨーロッパでは家庭内暴力など少数者が経験する問題として論じられる傾向があるが、南アフリカのようにかつて植民地であった社会では社会全体を特徴づける歴史的な問題である。また別の例を挙げると、国家という概念も「北」の



理論で想定されている以上に「南」の社会では重要である。

これらの点を踏まえ、コンネル教授はジェンダーに関する「知」の今後のあり方として「モザイク・エピステモロジー」を提案した。これは、南北のヒエラルキーではなく様々な文化や地域がモザイクを構成するひとつひとつのタイルのように平面に並んでいる様子をイメージしたものである。モザイクの欠片ひとつひとつは、それぞれの独自性を保っているが、同時に隣接する欠片との接点も持つ。そして、この「接点」は、単にくっついていのようにみえるが、より適切に表現するならば、オーストラリアのジェンダー研究者 Chilla Bulbeck のいう「編みこみ」(braiding) であるとコンネル教授は述べた。

このモザイク・エピステモロジーが実際にどのように機能するのか、あるいはどこまで効果的に機能するのかについては議論の余地があろう。しかし、とりわけ資本主義のグローバル化が進み、マクドナル化(リッツア)や文化帝国主義(トムリンソン)が危惧される中、それぞれの地域や文化がその独自性を失うことなく、しかし「他者」や自らにとって異質なものを孤立しているのではなく、むしろ積極的に関わりながら新しい「知」を生み出していく。そのような営みを構想する試みとしてコンネル教授の講演は示唆に富んでいた。

では「北」の圧倒的覇権によって特徴づけられた「知」の生産に我々はいかに介入すべきか、あるいはそもそも介入できるのか。フロアからは、英語で発表された論考を用いずにジェンダーの理論を形成していくことがそもそも可能なかどうか、現状を変えるためにアジアの研究者に何ができるのか、といった質問が寄せられた。例えば、日本語を母語とし、日本を拠点に活動する研究者にとって、英語という外国語を用いて「北」出身の研究者らが作り上げた「知」の産出システムに介入していくことは容易ではない。コンネル教授は、それでも関わっていくことを提案した。それは学術雑誌の査読プロセスにおいて、あるいは海外の研究者とのやりとりにおいてかもしれない。いずれにせよ、何かがおかしいと感じたときにはおかしいと異議申し立てする。そのような小さな行動の積み重ねによって、少しずつではあるが、何かを変えていくことができるはずとのことであった。

ところでこのたびコンネル教授をお招きした理由のひとつに、教授がオーストラリアという周縁から「北」に関わってこられた研究者のひとりであるということもあった。これは英語圏におけるオーストラリアの周縁性についてということだけではない。コンネル教授は、そのようなオーストラリアの周縁性とも関連しているオーストラリア社会内部における植民地性の問題、とりわけ支配と抑圧、暴力と破壊の歴史が持つ今日的意味にも向き合ってきた研究者でもある。その取り組みにおける葛藤が、本講演のテーマとなった



グローバルなジェンダー知の生産についてコンネル教授が関心を寄せる背景にはあったのである。日本とオーストラリアは地理的にも文化的にも歴史的にも大きく異なるが、日本もまた社会内部に植民地性の問題を抱えている。ジェンダー知の産出において日本は「南」の一部かもしれないが、別の局面においては「北」に位置付けられることもあるだろう。

主催：明治大学情報コミュニケーション学部、情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
 協賛：国際ジェンダー学会、ジェンダー史学会、日本スポーツとジェンダー学会  
 協力：明治大学セクシュアルマイノリティサークル Arcolis

明治大学  
 情報コミュニケーション学部  
 ジェンダーセンター特別講演会  
 学部創設 10周年記念行事

# ジェンダーの 脱植民地化を目指して

—世界規模で考える男性性、女性性、ジェンダー関係  
 Decolonising Gender: Understanding Masculinities, Femininities and Gender Relations on a World Scale

レイウイン・コンネル氏  
 Professor Raewyn Connell

2014.7.21  
 Open 16:30 | Start 17:00

会場：明治大学駿河台キャンパス  
 リバティタワー1階リビティホール  
 講演言語：英語（逐次通訳あり）  
 入場無料・申込不要  
 企画・コーディネーター：司会：田中洋美、高峰修（明治大学）

Venue: Liberty Hall, Liberty Tower 1F,  
 Meiji University, Surugadai Campus  
 Lecture is free. No pre-registration is required.

講師略歴：  
 オーストラリアを代表する社会学者・ジェンダー研究者。シドニー大学教授。特に優れた業績を持つ教授に与えられるユニヴァーシティ・プロフェッサーの称号を持つ。著書は18ヶ国語に翻訳され、国際的に最も知られるジェンダー研究者のひとりである。とりわけジェンダー関係の社会構造や男性性に関する理論構築に大きく貢献し、氏の研究は社会学のみならず教育学、スポーツ学、歴史学、犯罪学、メディア研究等、様々な学問領域で広く引用・参照されている。

◎詳細、お問い合わせはこちらまで <http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>  
 Twitter: @Meiji\_gender

かつて植民地において日本語使用政策を導入した歴史を持つ日本に生きる我々にとって、英語の使用が否応無く求められる現代社会のありようについて考えることには意味があるはずだ。このような問題関心からもこの度の講演会を企画した次第である。

なお本公演の質疑応答ではたくさんの質問とコメントを聴衆の方々から頂戴した。当日は時間の関係から全てを取り上げることはできなかったが、コンネル氏たっでの希望で質問とコメントのコピーをお渡しさせていただいた。また、日本についてもっと知りたいということで、お薦めの文献を尋ねられた

が、英語で出版されているものとなると非常に限られてしまうのが残念であった。英語で研究活動をするのは大変であるが、英語が英語圏・非英語圏の多くの研究者との交流を可能にしてくれる面もある。これは有意義なことである。その意味においても、「北」の優位を放置せずに何らかの形で関わっていくことが求められているといえよう。その第一歩として、このような問題について考える機会を提供して下さったコンネル教授とその問題に関心を持って講演会に足を運んで下さった聴衆の皆様にお礼を申し上げます。





# 上映会・特別イベント





明治大学情報コミュニケーション学部創設 10 周年記念行事

ジェンダーセンター上映イベント

**資料映像上映会「女性法曹界の道を拓いた人々－明治大学専門部女子部の足跡－」**

【主催】情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター，  
情報コミュニケーション学部

【後援】法科大学院ジェンダー法センター／学長室／大学史資料センター

【日時】2014 年 5 月 30 日（金） 17:00～19:00

【会場】明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 1 階 グローバルホール

【参加人数】約 30 名

【上映後のコメント】吉田恵子氏（元情報コミュニケーション学部教授・前ジェンダーセンター長）

**報告：細野はるみ（情報コミュニケーション学部教授）**

女性の社会参加が非常に制限されていた昭和初期の 1929（昭和 4）年、明治大学は将来の女性の活躍を見すえて法科と商科からなる「専門部女子部」（以下、「女子部」と略称）を開設し、そこからは法曹界をはじめ専門職に就く優れた女性たちを輩出した。このことは本学部ジェンダーセンター発足に至る経緯を説明する時に必ず触れる明治大学の女子教育の歴史だが、それを過去の話として埋もれさせずに今後の学生にもわかりやすく伝えていくことを積年の課題とし、そのための資料を収集して来られた初代ジェンダーセンター長の吉田恵子先生が資料映像としてまとめられ、2014 年 3 月のご退職から一月ほど後に完成した。資料映像作成に当たっては、ジェンダー関連の研究・教育を支援する明治大学シモーヌ・ヴェイユ基金の援助も受けることができた。

映像では専門部女子部誕生前夜の大正末期の社会情勢から説き起こしている。第一次世界大戦後の大戦景気に伴い工場やデパートの傭員、バスガール、タイピスト等の様々な職種の職業婦人が増加していくさま、多くは良妻賢母教育を旨とした当時の女学校の女学生の風景、大正デモクラシーと普通選挙法の成立、それが男子のみであったために女性にも政治参加の機会を開こうとする「新婦人協会」「婦人参政同盟」などの婦人運動の興隆、そして女性にも弁護士への門戸を開こうという弁護士法の改正運動を背景に、昭和 4 年に明治大学に法科・商科からなる専門部女子部が開校した。女性が政治や社会に参加するには、



まず良妻賢母教育ではない、職業に必要な法律や政治・経済などの基礎知識を学ぶことのできる高等教育がなされなければならないという趣旨で、明治大学の3人の教授たち、横田秀雄・穂積重遠・松本重敏らの尽力で開校にこぎつけた。その設立趣意書全文が資料中に掲載されているが、このことがいかに時代を先取りした取り組みであったかということが十分にうかがわれる。

次いで、開校当初以降の入学者の顔写真台帳と、その後の活躍に伴っての写真映像をもとに、各期の卒業生の各分野での活躍の群像が描かれる。後に明治大学短期大学の教員になった高窪静江、明治大学初の女性学部教員（法学部）であり女性初の法学博士の立石芳枝、以下、女性初の代議士、女性初の税理士、等々、各分野で「女性初の」と冠される人材が続く。極めつけは1938（昭和13）年の司法科試験（当時は高等文官試験司法科）に久米愛・三淵嘉子・中田正子の3名の卒業生が合格し、これが日本で女性の初の弁護士の誕生となったことだった。実はこの頃女子部の入学者は減少を続け、あわや廃校かとの危機にあったが、これに刺激を受けて、戦前・戦中の困難な時代にもかかわらずその後も法曹界を目指す女子学生が入学、司法科試験や行政科試験の合格者のほとんどを女子部から出し続けた。

戦後は大々的な教育システムの改変があり、女子部もいくつかのプロセスを経て明治大学短期大学と改められた。4年制の大学に女性が受け入れられるようになった後にも女子の進学先として2年制の短期大学への入学希望は多く、法律科・経済科ともに社会科学の専門教育を受けられるユニークな短期大学としての需要は大きかった。短期大学終了後も関連の4年制学部に進学し、更に職業人として活躍する女性を多く生み出していった。現在、社会全体で男女共同参画の必要性が叫ばれ、女性の社会参加を促す施策が諸方で展開されているが、明治大学専門部女子部の目指したところはまさにこのことの実現であったといっていいただろう。女性の社会進出を促すにはそれを準備する教育の必要なことや、職業社会の多数者である男性の理解と後押しが必須であることを現実的に証明した。しか

情報コミュニケーション学部創設10周年記念行事  
資料映像上映会

女性法曹界の道を拓いた人々  
—明治大学専門部女子部の足跡—

日時：2014年5月30日（金）  
17:00～19:00（開場16:30）  
場所：グローバルフロント1階  
グローバルホール

主催：情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
情報コミュニケーション学部  
後援：法科大学院ジェンダー法センター  
学芸室  
大学史資料センター

※予約不要・入場無料




女性の社会参加が非常に制限されていた昭和初期、明治大学は将来の女性の活躍を見据えて法科と商科からなる「専門部女子部」を開設しました。そして、そこからは法曹界をはじめ、専門職に就く優れた女性たちを輩出しました。「女子部設立趣意書」の全文や、女子部開設からの初期の入学者の顔写真台帳などの貴重な資料も織り込み、その経緯や社会的意義を探ります。

企画：映像資料「女性法曹界の道を拓いた人々」制作委員会  
制作：明治大学ヒキタス教育推進事務局

※上映時間約65分。上映に際して、吉田恵子氏（情報コミュニケーション学部准教授）による制作にまつわるお話を予定しています。

詳細については情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターのHPをご覧ください。  
<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>



も、一時的に一人の特異な有能な人材を出すことにとどまらず、教育機関として継続してその予備軍を育て続けたことは、今後の男女共同参画の実現に向けての大きなモデルとなるであろう。

その後、女子の高等教育の機会が増えるにつれ短期大学の需要は減り続け、2003 年度を



もって入学試験を停止、2004 年には新しく男女共学の情報コミュニケーション学部が誕生した。短期大学と情報コミュニケーション学部は組織として直結しているわけではないが、新学部は時代のキーワードを負ってまた別の意味で時代を先取りする教育・研究を展開する学部と目されている。併せて女子だけの教育機関が明治大学から姿を消すことになり、女子部の歴史的意義が次第に忘れられていってしまうことを危惧して、ジェンダーを核とし、多様性への洞察と理解を深めるよう、さらに次の時代

上映後に話をする吉田恵子氏（前センター長）を見越した研究・教育・社会連携を目指す「情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター」が開設された。

資料映像上映後は吉田恵子先生により、関係者の高齢化を考慮してインタビューを急がねばならなかったことなど、映像制作にまつわるお話が披露された。

上映会後のアンケートのコメントで多かったのは、宣伝が行き届かず参加者が少なく残念だったということだった。主催者としても同感で、今後の課題としたい。資料映像はくり返し上映することができるので、10月19日のホームカミングデーで卒業生対象に2度の上映を行った。さらに、明治大学が女性研究者研究活動支援に採択されて大学全体に男女共同参画の機運が高まってきているので、今後も上映の機会を設定し実施していきたい。なお、この資料映像は全体で約65分間だが、そのダイジェスト版（16分弱）を、ジェンダーセンターのホームページからのリンク（イベント一覧・終了したイベント）で見ることができる。

（ダイジェスト版のリンクの URL）

<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/info/2014/6t5h7p00000hghso.html>



明治大学情報コミュニケーション学部創設 10 周年記念行事

ジェンダーセンター上映イベント

**映画「少女と夏の終わり」上映会＋座談会**

【主催】情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター，  
情報コミュニケーション学部

【日時】2014 年 12 月 16 日（火）16：20～19：45

【会場】明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 1 階 グローバルホール

【参加人数】108 名

【コーディネーター】内藤まりこ（情報コミュニケーション学部専任講師）

【座談会登壇者】石山友美（監督），佛願広樹（撮影・編集），  
田中洋美（情報コミュニケーション学部准教授），南後由和（情報コミュニケーション学部専任講師），脇本竜太郎（情報コミュニケーション学部専任講師），  
内藤まりこ（情報コミュニケーション学部専任講師）

**報告：内藤まりこ（情報コミュニケーション学部専任講師）**

本イベントでは、新進気鋭の女性映画監督石山友美氏による作品「少女と夏の終わり」（2012 年製作，2013 年東京国際映画祭正式出品作品）の上映会と，石山監督と撮影・編集を担当された佛願広樹氏，本学教員脇本竜太郎氏，田中洋美氏，南後由和氏，報告者 4 名による座談会を行った。本報告では，来場者がアンケートに記した感想を交えながらイベントの様子を紹介する。

まず，イベント前半部の上映会に関して報告する。映画「少女と夏の終わり」は，山間部の小さな村に住む少女の成長に焦点を絞りつつ，それと平行して，彼女を取り囲む村人達のさまざまな日々の営みを描く群像ドラマである。来場者は，この映画に織り込まれたさまざまな物語の要素を興味深く感じたようである。

- 「なんだか複雑な気持ちになりました。難しいようで，日常にありふれているような，そんなお話でした。様々な視点から描かれていて，考えさせられる，見ていて飽きないお話でした。」
- 「田舎を舞台にしたノスタルジックな作風と，田舎特有の閉鎖的な雰囲気がいまり（ママ），ジェンダーで悩む少女たちの苦悩がよく描かれていたと思います。」
- 「少女時代の不安定さ，性や恋愛に対する嫌悪や憧れ，友情と秘密の共有，自分



の過去を思い出してみても「あったなあ」と感じる節が沢山ある作品でした。」

- 「思春期の複雑な心の変化や狭いコミュニティの中で生きていくということの苦悩がよく伝わってきました。特別劇的な何かがあるのではなく、じわじわと変化している様子がまた悩ましいと感じました。」

- 「映画から見えてくるのはジェンダーだけではなくて、社会性や主体性など、日本社会が群像劇を通して垣間見る事ができたと思います。」

続く座談会は、本学教員4名が自分の専門分野に立脚する形で、映画のどのようなところに着目したのか、どのような点を面白いと感じた

のか、さらにはどのような映画であると解釈したのか等について述べ、石山・佛願両氏がそれに応答するという形で進行した。登壇者4名はそれぞれ社会心理学、ジェンダー研究、都市社会学、文学の異なる研究分野の研究者であることから、着眼点と同じであっても、導き出された



座談会では異なる分野の視点から映画が読み解かれた

解釈が異なっていたり、異なる場面やモチーフから共通する解釈が抽出されたりすることがあった。このように、いくつかの共通するテーマが浮上しつつ、そこから多様な映画の読み解き方が提示される形での議論の展開を、来場者には楽しんでいただけたように思う。

- 「教員との直接の意見交換が大変おもしろい。」
- 「4人の解説が独自の研究とうまく関係していて面白かったです。」
- 「いろいろなテーマが出てきておもしろかったです。群像劇と同じようにこの映画でも色々な人が色々なことを喋っているという感じがしました。」



- 「都合が合わず映画を見ることができなかったので、座談会の内容から推測しながら聞いていましたが、たくさんの問題が絡まった映画だと思い興味がわき、ぜひ見てみたいと思いました。」
- 「教授によって目を当てる（ママ）ポイントがまるで違い、こんな多様な観点から読み解くことができるのだと驚きました。」
- 「先生方の座談会をきいて、ジェンダーにしても様々な角度から映画を見ることができるということがわかり、自分でも様々な角度から見ようと思った。」
- 「同じ作品であるのに人によって見方が大きく違い、作品の奥深さを知ることができた。他の映像作品でもこのようなイベントがあると面白いと思う。」



(右から順に) 監督、撮影者、主演の二人

座談会後の質疑応答では、何人もの学部生が監督に対し積極的に質問を寄せていたのが印象的であった。また、映画に主人公役で出演された菅原瑞貴さん、上村愛さんが来場くださり、舞台挨拶をしてくださるというサプライズもあった。以下の感想に見られるように、学生が普段の生活ではあまり接触することのない、映画製作者から直接話を聞く機会を提供できたこともよかったように思う。

- 「制作にあたっての仕組みや裏話が聞けてよかったです。」
- 「実際に主演の二人が来てくれたところがまずおどろきだったし、感動した。」
- 「先生方のお話はもちろん、監督への質問を通して、新たな視点から映画を振り返ることができ、大変興味深かったです。」
- 「普段は映画を見て自分の世界に浸ることがほとんどですが、今回のように、私が大学で学んでいる視点から教授の方が話をされて、さらに監督さんの意図と結びつけて聞いたのはすごくよかったです。」

本イベントは本学部の学部生を中心として 100 名を超える来場者に恵まれた。3 時間に及ぶ長丁場となったが、登壇者だけではなく、来場者を含めた形での充実した対話の時間となったように思う。イベントを盛会へと導いてくださった石山友美氏、佛願広樹氏、脇本竜太郎氏、田中洋美氏、南後由和氏にこの場を借りてお礼申し上げる。



明治大学情報コミュニケーション学部創設 10 周年記念行事

ジェンダーセンター特別イベント

『アナ雪』現象を読み解く！（田中・内藤合同ゼミ研究発表会）

【主催】情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

情報コミュニケーション学部田中ゼミナール・内藤ゼミナール

【日時】2015年1月21日（水）16：30～19：30

【会場】明治大学駿河台キャンパス リバティタワー2階 1021 教室

【参加人数】65名

【コーディネーター】田中洋美（情報コミュニケーション学部准教授）、  
内藤まりこ（情報コミュニケーション学部専任講師）

【コメンテーター】生方智子（明治大学文学部准教授）、  
出口剛司（東京大学文学部准教授）

【発表者】情報コミュニケーション学部 田中・内藤合同ゼミナール受講生

【プログラム】第1部：メディアテキストとしての『アナ雪』－物語分析、表象分析  
第2部：『アナ雪』ブームを探る－映画と主題歌のオーディエンス分析  
第3部：討論・質疑応答

報告：小林雅人・鈴木萌（情報コミュニケーション学部3年）

公開以来日本において大ブームとなった米ディズニー映画『アナと雪の女王』（以下『アナ雪』）。その実態を探るべく田中・内藤合同ゼミによる研究が行われた。本合同ゼミでは物語分析、表象分析、映画ブーム分析、主題化ブーム分析を行うべく、4つの班に分かれて調査・研究・発表を行った。そして研究発表会をジェンダーセンターの特別イベントとして実施する運びとなった。

発表会は三部構成で企画され、まず第1部、物語分析班の発表から始まった。同班は今までのディズニープリンセス作品と『アナ雪』を比較し、ナレーションの有無から『アナ雪』は物語を現在進行している出来事として描く工夫がなされていたことを明らかにした。構造分析では、物語の構造からみて本作品の主人公はアナであること解き明かした。記号論的分析では、アナとエルサの所属する場の違いを明らかにした。イデオロギー分析では、「真実の愛」という言葉の持つイデオロギーについて明らかにし、物語の新たな可能性を示した。

続く表象分析班は、モブに映し出された性別分業や社会的上下関係の存在を示した。さ





らに、エルサとモブの関係性が、エルサの魔法という「差異」による影響を受けていることを明らかにした。また、主要な男性登場人物であるハンスとクリストフの表象から“完璧な「王子」の不在”を主張した。さらに、メインヒロインであるアナとエルサは対照的なダブルヒロインであることを明らかにした。アナと男性登場人物との関係についても、女性のアナが自立できていない存在として描かれていることを示した。

この結果から、登場人物が典型的な男らしさ、あるいは女らしさを持った人物として表象されつつ、従来のジェンダー秩序の枠にとらわれない表象もみられると述べられた。

第2部では、オーディエンスに関する研究を取り上げた。映画ブーム班は、『アナ雪』がいかにしてヒットしたのかを明らかにするため、データ収集・分析を実施した。結果として次の三点について発表した。第一に、定番と意外性の併存である。ディズニー作品の定番を「わかりやすさ」や「ハッピーエンド」であるとし、かつ「王子と結ばれない」、「王子の裏切り」といった意外性も同時に存在していると述べた。第二に、歌の優位性である。今回の調査ではオーディエンスが『アナ雪』の魅力



に見いだす傾向が強く認められた。以上から、定番と意外性を兼ね備えた物語と劇中歌の魅力の相互作用により「嫌い」を生ませなかったのではないかとの主張がなされた。第三に、消極的好感である。映画ブーム分析班は、調査の結果オーディエンスが作中全ての要素に好感を持っているのではないと指摘した。これらの分析結果から、映画ブーム分析班は主要メディア言説と今回の分析結果のズレや、ディズニー作品の王道パターンに対する視聴者の受動的視聴を批判的に論じた。



4つのグループの学生たちによる発表が行われた

結果オーディエンスが作中全ての要素に好感を持っているのではないと指摘した。これらの分析結果から、映画ブーム分析班は主要メディア言説と今回の分析結果のズレや、ディズニー作品の王道パターンに対する視聴者の受動的視聴を批判的に論じた。



次に主題歌ブーム分析班による「Let It Go」ブームに関する研究発表が行われた。ここでは四つの分析結果が呈示された。第一に、主題歌のコモン・ミュージック化である。小泉恭子氏（『鳴り響く＜性＞ポピュラー音楽とジェンダー』勁草書房, 1999年, p32～57）によれば、コモン・ミュージックとは同年代が盛りあがって歌える楽曲を指す。今回の調査



では「Let It Go」がコモン・ミュージックの特徴を持っていることがわかった。第二に、メロディの優位性である。第三に、映像を介する曲の印象化、つまり「曲と映像の相乗効果」の存在である。そして最後に、TVを中心とするメディア戦略を挙げ、未だにTVがブームに大きな影響をもたらしていることを主張した。

発表の後、生方氏（左）と出口氏（右）がそれぞれコメント

以上の分析結果から、

オーディエンスが歌詞の意味を理解せずに楽曲を消化した結果、歌詞の重要性が薄れたのではないかという論点が導き出された。また、「Let It Go」はメディアの垂れ流しによりコモン・ミュージックとなったのではないかと主張した。

四つの発表の後、第3部ではコメンテーターの生方智子先生と出口剛司先生からコメントをいただいた。生方先生は、物語分析班に対して、それぞれの分析で得た結果を元に全体的な解釈へと踏み込むと面白いのではないかとアドバイスをした。また、人間社会と雪山との関係は固定的ではなく、より入り組んでいるのではないかといった見方も提示した。出口先生は、表象分析についてアナの特性に関して男性的な部分の存在も指定できないことを指摘するとともに、エルサの変化の捉え方を評価するコメントを頂いた。また映画ブームと主題歌ブームについては、消極的好感とコモン・ミュージック化に関して他作品と比較し『アナ雪』独特の特徴を見つけ出せると良いのではないかとアドバイスを頂いた。

学生主体でこのようなイベントを開催することは私たちにとって初めての経験であったため試行錯誤することも多かったが、研究も発表会の準備も非常に良い刺激となった。今回の経験を元に、今後の活動を充実させていきたい。



## 他機関との連携・協力





**\*\* イベント \*\***

**ホームカミングデー（主催明治大学）開催イベント**  
**明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター**  
**◆上映会「女性法曹界の道を拓いた人々—明治大学専門部女子部の足跡—」**

【日時】2014年10月19日（日）第1回 13:00~14:30/第2回 15:00~16:30

【場所】明治大学駿河台キャンパス リバティタワー11階 1113教室

【概要】明治大学の卒業生のためのホームカミングデーで、ジェンダーセンター運営委員が中心となって制作したDVD「女性法曹界の道を拓いた人々」が上映された。第1回の上映には15名、第2回の上映には23名の卒業生やその関係者らが訪れ、日本の女子高等教育に先駆的役割を果たした明大専門部女子部の足跡を辿った貴重な映像資料に見入った。



**\*\* 共催イベント \*\***

**明治大学男女共同参画推進センター主催**  
**共催：情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、**  
**学長室、法科大学院ジェンダー法センター**  
**◆女性研究者研究活動支援事業キックオフシンポジウム**  
**「前へ！ 明治大学の男女共同参画」**

【日時】2015年3月8日（日）13:00~16:30

【場所】明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階 グローバルホール

【パネリスト】細野はるみ（情報コミュニケーション学部教授）、

安藏伸治（明大付属明治高校・中学校校長，政治経済学部教授）他

【コーディネーター】辻村みよ子（法科大学院教授）

【司会】浜本牧子（農学部教授）

【概要】2014年度に明治大学は文部科学省の「女性研究者支援事業（一般型）」に採択された。新たに始動した男女共同参画推進センターは、今後の学内での男女共同参画や研究者支援をテーマにシンポジウムを開催。細野はるみジェンダーセンター長（情報コミュニケーション学部教授）がパネリストとして参加した。





# 研究プロジェクト





---

---

「女性専門職の過去・現在・未来」

**Women in professional occupations: The past, the present, the future**

武田政明・吉田恵子・細野はるみ・平川景子・長沼秀明・岡山礼子

---

人は、だれでもがその能力と希望に応じて、その選択した職業を通じて、自己実現をはかり社会貢献をする。そのことによって、社会は、安定的に維持され発展の継続がなされる。したがって、職業の選択と遂行の場面において、必要な能力の獲得と自由な選択意思および円滑な遂行を阻害する要因となるものの分析は、きわめて重要である。このことは、現在でも数々の点で克服できていない女性の職業選択の自由および職業継続・遂行の阻害要因を根源的などころから除去する解決手段を考える際にも同様である。本研究は、かつては、女性が選択することができなかった、いわゆる女性専門職に注目し、女性がその専門職に就くために克服していった過程を、それぞれの時代ごとに、政治、経済、文化的背景等を十分に踏まえて総合的に研究する。

<2014 年度の成果>

わが国では、現在でも、高度な能力や資格が必要とされる専門職と呼ばれる職種においても、依然として職域の分離や収入格差などいわゆるジェンダーに関わる格差問題が存在している。本研究は、このような格差が生み出されるさまざまな条件を、その時代時代の社会状況との関連において解明することを目的とする。そのために、専門職の代表ともいえる医師・看護師、弁護士を研究対象として取り上げ、それぞれの職種について、誕生・成立過程、ジェンダーに関わる問題の発生・内容を、その時代の国際状況、国家目的、社会状況等の分析とリンクさせる形で研究している。女性医師については、その誕生からその後のそれぞれの過程において、その実際上の必要性は認識されながら、制度上の大きな障壁を乗り越えるためにその都度多大なエネルギーが要されている。それとの比較では、総じて女性弁護士については、制度上の制約の改正・撤廃のためにそれほどの多大なエネルギーを要した形跡は認められない。その理由としては、医師の業界と法律の業界とで、それぞれの問題ごとに女性が進出されることでの男性が被るないし感じる不利益性の違い、および国家目的遂行上の違いがあったことにその根源が求められるということである。



---

---

「企業における女性の活躍促進に関する調査研究」

**Strategies for promoting women in companies**

牛尾奈緒美

---

企業内の女性の活躍を促進することは、経営戦略上ますます重要な課題となってきた。しかし、その実現のためには多くの乗り越えるべき障害があり、組織文化の改革はもとより、人事制度の改革と適正な運用に向けての実践的対応など難題が山積している。本プロジェクトでは、これらの問題解決とITの効果的利用との接点について調査・研究を行っていく。また、女性社員の就業意識などについても調査を行っていききたい。

<2014年度の成果>

日本企業における女性管理職の割合は極めて低く、それを改善し女性の活躍を促進することが今後の企業経営にとって大変重要であることがさまざまな観点から指摘されている。本研究プロジェクトでは、経営組織のマネジメントの観点からその有用性を捉え、その取り組みに積極的な企業の事例研究や活動推進の当事者ならびに活動対象となる女性従業員に対する聞き取り調査等を行ってきた。

今年度は、その成果として、いくつかの論文発表、国際学会での口頭発表、書籍の出版、各種講演会での講演等の活動を行った。

なお、これらの研究や成果発表にあたっては、文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」(2012年～2016年度)「組織情報倫理学:営利組織および非営利組織における情報倫理問題への対応のための政策提言に関する研究」サブテーマ「情報化とジェンダー」(主査:牛尾奈緒美)や、独立行政法人経済産業研究所(RIETI)が主催する研究プロジェクト「ダイバーシティとワークライフバランスの効果研究(プロジェクトリーダー樋口 美雄:2012/09/12 - 2014/03/31)からの援助等も頂戴した。



---

「戦後ドイツにおける『公共性』概念とジェンダー」

The public and gender in postwar Germany

出口剛司・宮本真也・水戸部由枝

---

ドイツの社会理論家 J.ハーバーマスの「公共性」概念は、「68年運動(学生運動)」と密接にかかわって発展し、今日、市民社会論や社会運動論の文脈で極めて重要な意義をもっている。では、同時代の「新しい女性運動(第二波フェミニズム運動)」は、「68年運動」の意義やその「公共性」概念をどのように解釈したのだろうか。本プロジェクトでは、1960年代～70年代に展開された「公共性」をめぐる議論を、当時女性運動が掲げたスローガン「個人的なものは政治的なもの(The Personal is the Political)」と摺合せつつ、ドイツ・ジェンダー史研究の視点から捉えなおす。そのことによって「公的なもの」と「私的なもの」のボーダレスの可能性と限界を明らかにしていく。

<2014年度の成果>

公共性(圏)に関する研究は、J.ハーバーマスによる市民的公共圏の歴史的研究にその起源がある。しかし、そうした公共性(圏)をめぐる問題系を正しく把握するためには、対象となった18世紀的・市民的公共圏からいったん離れ、一方の戦後ドイツにおける「議会内」批判的勢力の後退、他方における「議会外」体制批判運動の活性化という現実にあらためて注目する必要がある。つまり、議会の批判的機能の喪失及び新しい社会運動の芽生えという同時代的状況を踏まえることによって、公共性(圏)概念の真の意味での現代化が可能となるのである。本研究課題が注目する「個人的=私的なものは政治的=公的なもの」というスローガンは、フェミニズム運動が私的領域から公的領域への躍進を志向していたことを示しており、その意味において、本事例を通して公共性(圏)がもつ媒介機能の有効性と限界、さらに硬直した議会政治の下でその民主的オルタナティブとしての議会外運動の可能性、議会外言論空間と議会における討議との接合メカニズムを解明する糸口を手にすることができる。





---

「後期近代におけるジェンダー規範の変容と持続」

**Gender norms in the Post-modernity: Change and continuity**

田中洋美・石田沙織・他

---

近代化の過程で形成された伝統的なジェンダー規範は、後期近代とされる現代社会においてもジェンダー関係の社会構造を根底から支える、いわば通奏低音のような役割を担っている。本プロジェクトでは、伝統的ジェンダー規範の変容に関わる女性の集合行為を考察する。今年度は二つの集合行為を取り上げる。反DV政策形成過程における女性の集合行為とメディア空間に見られる女性コミュニティである。後者では、腐女子やLOHAS志向の女性（例えばヨギーニ）といった集団のオーディエンス分析を行う予定である。いずれの事例においても、これまでに一定のデータを収集しているため、今年度は入手済みデータの整理と分析ならびに必要なに応じて新たなデータの収集・分析を行っていく。

<2014年度の成果>

今年度は反DV政策形成過程における女性の集合行為とメディア空間で形成される女性コミュニティの二つについて個別に調査した。前者については、昨年度に収集したインタビュー・データを分析し、二次コーディングまで終えることができた。今後は理論的な考察に入り、その結果を発表していく予定である。後者については、腐女子を取り上げ、そのマンガ消費について実証研究を行った。具対的には、チクセントミハイのフロー理論およびホールのメディア読解の三類型を援用し、半構造化インタビューにより収集したデータを分析した。分析の結果、腐女子と呼ばれる女性たちがいかんにしてマンガというメディアを楽しみ、消費しているのか、また自らの腐女子としての余暇活動にどのような意味を付与しているのかを明らかにした。また彼女たちは腐女子ではない人々との間だけでなく自らの集団内部においても作品の解釈や二次創作におけるスキル等に基づく差異化の実践を行っていることがわかった。さらに彼女たちのメディア読解には既存の異性愛的なジェンダー・セクシュリティ規範を受容する部分があり、彼女たちのクィア・リーディングが既存のジェンダー秩序を攪乱しつつも根底から覆してはおらずその変化よりもむしろ再生産に寄与する側面があることもわかった。



---

「性別二元性を攪乱する女性アスリートの新聞報道分析」

**An analysis of newspaper articles concerning female athletes**

**who disturb sexual duality**

高峰修・田中洋美

---

スポーツ、特に競技スポーツの領域は、女性と男性を明確に区分して競技を行う性別二元制に基づいて成り立っている。女性と男性を区分する方法としては性別確認検査があり、一時期、オリンピック大会に出場する女性選手に適用されていた。時としてその性別二元制では区分されない競技者が登場する。最近では南アフリカの陸上競技選手であるセメンヤ選手や、韓国のサッカープレイヤーであるパク・ウンソン選手を挙げることができる。本プロジェクトでは、競技スポーツ界の性別二元制を攪乱してきた国内外の事例に着目し、そうした事例を国内メディアがどのように取り上げ報じてきたかを明らかにする。国内メディアは大手新聞三紙とし、対象期間は性別確認検査がオリンピック大会に導入された 1968 年から現代までとする。

<2014 年度の成果>

朝日・読売・毎日新聞の各データベースを使って、1960 年から 2014 年までの期間について検索を行った。キーワードは性転換、性別適合、両性具有、アンドロジニー、性別確認、女性確認、性別判定、性別検査、セックスチェック、セックステスト、性別詐称の 11 語である。

朝日新聞を例にとると、以上のキーワードがスポーツの文脈で使用されていたのは 1960 年代 8 件、70 年代 5 件、80 年代 0 件、90 年代 5 件、2000 年代 14 件、2010 年代 7 件である。

1960 年代の記事では、1968 年に開催されたオリンピックメキシコ大会においてセックスチェックが導入されること、そしてその方法論の報告が中心であり、検査自体が持つ様々な問題については触れられていない。そして検査を拒否すれば選手資格が剥奪されることを伝え、また別の記事では、1967 年に開催された陸上競技欧州選手権においてポーランドの女性選手が「女子として不適格」と診断された事例を紹介している。



こうした傾向は 1970 年代になると変化をみせる。1972 年の記事は、セックスチェックが競技者の人権に関わることに触れている。また 1977 年の記事は、染色体を分析する方法では男性と女性を完全には分けられないことを伝えている。しかしこうした指摘にもかかわらず、1980 年代にはこれらの語を扱う記事は見られなかった。

1990 年代の記事は、1994 年に開催された広島アジア大会におけるセックスチェックについて報道している。しかしそれらは根毛を使った検査の精度が高まったことに焦点を当てており、「万一、引っ掛かった選手には『体調不良』など、それとなく理由を付けて帰国させるそうだとしている。つまり、1970 年代に指摘された人権や判定限界についての根本的な問いかけはみられない。

2000 年代になると事態が動き出す。まずは性別適合手術を受けた選手の出場に関する国際オリンピック委員会 (IOC) の規定作成について報告されている。しかしいったん落ち着きを見せたこの問題は、性分化疾患とされる女子選手が 2009 年に登場したことによって IOC に新たな問題を突きつけた。2010 年代の記事はその続報であった。

今後は他の二紙も合わせた傾向を把握し、また質的にもより深めた分析を行っていく予定である。



---

---

「資本主義的近代化における不平等の編成」

**On dispositions of inequality in the era of capitalist modernisation**

宮本真也・出口剛司

---

社会の進展を言い表す表現としての近代化(モダニティ)は、現在、まず第一に西洋的モデルにしたがってのみ語るができないとされ、それぞれの社会、地域で見られる近代化のありようは、さらに細分化できる諸要素の編成であると言える。それぞれの近代化の特徴は、この編成のあり方によって差異をなしている。こうした選択的な近代という考え方を受け入れるにしても、多様な編成のなかでも広く現代社会において見いだせるものとして指摘できるのが、資本主義的近代化というあり方であるのだが、本研究においてはこのダイナミズムを特に象徴的な正当化秩序という観点から分析を加えたい。

<2014 年度の成果>

東欧革命を通して実質的な社会主義・共産主義政権が崩壊することにより、「近代」へと向かう社会変動が実質的には特殊、「資本主義化」による「近代化」であったことが明白となった。元来「近代化」とは、自由と平等という二つの「大きな物語」によって支えられ、両者の矛盾を止揚するものとして友愛(あるいは社会的連帯)の理念が存在していた。しかし、その後の世界社会はグローバル化と金融資本の拡大により、新たな格差を生み出し、再び不平等社会の到来を経験しつつある。しかしこうした格差、不平等は、社会秩序の正当化をはかる論理を同時に必要としており、競争的自己実現(アクセル・ホネット) やリスクの個人化=自己責任化(ウルリヒ・ベック) とした言説がそうした正当化の資源として動員されている。経済学、社会学的な計量研究が明らかにしたジェンダー関係における格差や不平等もまた、階級格差と同様、そうした正当化の言説と象徴的権力によって支配されている。



# 業績一覧（2014年度）





◆◇ジェンダーセンター運営委員業績一覧（各 50 音順）◆◇

\*\*\*論文\*\*\*

牛尾奈緒美・志村光太郎（2014）「組織の情報化と女性の活躍推進」RIETI ディスカッション・ペーパー2013 年度：研究プロジェクト『ダイバーシティとワークライフバランスの効果研究』 経済産業研究所 （2014 年 5 月よりウェブ公開）

牛尾奈緒美・志村光太郎（2014）「海外就業とマネジメント経験の蓄積による女性のキャリア開発の可能性」RIETI ディスカッション・ペーパー2013 年度：研究プロジェクト『ダイバーシティとワークライフバランスの効果研究』 経済産業研究所 （2014 年 5 月よりウェブ公開）

牛尾奈緒美（2015）「カギは「思い込み」の解消と、2つの施策 優秀な女性のやる気を維持し、ロールモデルを増やしていくには」（「特集 今、価値が問われる女性リーダーを育成するということ」）人材教育,27(3), 32-35.

Tanaka, H. & Ishida, S. (2015). Enjoying manga as fujoshi: Exploring its innovation and potential for social change from a gender perspective. *International Journal of Behavioral Science*, 10(1), pp. 77-85.(co-authored with S.Ishida).

Tanaka, H. (2014). Women's empowerment. In A. C. Michalos (Ed.), *Encyclopedia of quality of life and well-being research* (pp. 7154-7156). Dordrecht, Netherlands: Springer (co-authored with Y.-Z. Chen).

矢野久・水戸部由枝（2015）「歴史学とセクシュアリティ——ダグマー・ヘルツォーク『セックスとナチズムの記憶』をめぐって」『三田学会雑誌』108 巻 1 号（近刊）

\*\*\*著作・編著\*\*\*

牛尾奈緒美・志村光太郎（2014）『女性リーダーを組織で育てるしくみ：先進企業に学ぶ継続就業・能力発揮の有効策』 中央経済社

水戸部由枝（2015）「性規範の多様化に揺らぐ 1960-70 年代の西ドイツ社会——『性の図解書』論争にみる公権力側の対応」辻英史編『歴史の中の社会国家』山川出版社（近刊）





**\*\*\* 訳 書 \*\*\***

水戸部由枝訳 (2015) 「第3章 取引としての性」レギーナ・ミュールホイザー (姫岡とし子監訳) 『戦争・権力・セクシュアリティ——独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』岩波書店 (近刊)

**\*\*\* 学会発表・報 告 \*\*\***

Ushio, N. & Shimura, K. (2014). The current state of the role of women in Japanese companies, and the potential of informatization to resolve problems. CEPE 2014 (june 23 to 25) and ETHICOMP 2014 (june 25 to 27), Well-Being, Flourishing, and ICTs, Les Cordeliers, the Campus of Pierre and Marie Curie University, Paris, June 23, 2014.

Ushio, N. (2014). Organizational information and enhancing women's participation in the workplace: Beyond gender stereotypes in Japanese work environment. Paper presented at the International Interdisciplinary Symposium “Knowledge, Construction through the Lens of Social and Cultural Diversity”, Srinakharinwirot University, Bangkok, November 4, 2014.

Tanaka, H. & Matsuoka, S. (2014). Sexual stratification in a digital age. Paper presented at the International Interdisciplinary Symposium “Knowledge Construction through the Lens of Social and Cultural Diversity”, Srinakharinwirot University, Bangkok, November 4, 2014.

Tanaka, H. (2014). A biographical analysis of women's political participation: The importance of politicization in women legislators' biographies. Paper presented at the XVIII ISA World Congress of Sociology, Pacifico Yokohama, July 17, 2014.

水戸部由枝 (2014) 「性規範の多様化に揺らぐ西ドイツ社会——『性の図解書』論争にみる公権力側の焦り」第11回ジェンダー史学会年次大会, 横浜国立大学, 2014年12月14日

**\*\*\* 講 演 \*\*\***

牛尾奈緒美 (2014) 「ダイバーシティを推進する組織の新たなリーダーシップと女性の活躍」日本生産性本部主催「2014年度人事担当役員定例懇話会」講演, ホテルルポール麹町, 2014年5月13日



牛尾奈緒美 (2014) 「女性の輝きが日本の未来を元気にするアベノミクスとウーマノミクス」  
明治大学校友会大阪府支部総会主催講演, 大阪キャッスルホテル, 2014年5月24日

牛尾奈緒美 (2014) 「アベノミクスと女性の活躍 ―もっと自由にしなやかに女性が働き続けるために必要なこと―」 「静岡県ニュービジネス協議会」平成26年度定時総会講演, グラ  
ンディエール・ブケトーカイ, 2014年6月12日

牛尾奈緒美 (2014) 「大学が拓く女性の未来と活躍舞台」鳥取大学男女共同参画室主催「女  
性科学者が語る研究の醍醐味 第2回」, 鳥取大学広報センタースペースC, 2014年7月16日

牛尾奈緒美 (2014) 「女性の力と日本の未来 自分の道を切り拓く3つの秘訣」公益財団法人  
高知市文化振興事業団主催「第64回 高知市夏季大学」講演, 高知市文化プラザかるぽー  
と大ホール, 2014年8月4日

牛尾奈緒美 (2014) 「女性の活躍推進が日本の未来を変える」NTTデータ研究所主催「経済経  
営フォーラム」講演, 渋谷区パッション, 2014年11月25日

牛尾奈緒美 (2014) 「女性の活躍を促進する人材育成を考える」人材育成学会「2014年度年  
次総会シンポジウム」パネリスト, 明治大学リバティータワー1001番教室, 2014.年12月7日

牛尾奈緒美 (2015) 「女性リーダーの活躍が日本企業を変える」中日新聞社・東海新聞社主  
催「第383回 中日懇話会」講演, グランドホテル浜松, 2015年2月19日

牛尾奈緒美 (2015) 「人事労務管理における現代的課題Ⅰ:ダイバーシティー・マネジメン  
ト」東京都社会保険労務士会主催「平成26年度人事労務管理研修会」講演, 2015年3月7日

細野はるみ (2015) 「パネルディスカッション:前へ! 明治大学の男女共同参画」明治大  
学男女共同参画推進センター主催「女性研究者活動支援事業キックオフシンポジウム」パネ  
リスト, 明治大学グローバルホール, 2015年3月8日



## 2014 年度 ジェンダーセンター運営委員会会議録

第 1 回運営委員会 2014 年 4 月 30 日

第 2 回運営委員会 2014 年 5 月 30 日

第 3 回運営委員会 2014 年 6 月 27 日

第 4 回運営委員会 2014 年 10 月 3 日

第 5 回運営委員会 2014 年 11 月 28 日

第 6 回運営委員会 2015 年 1 月 30 日

第 7 回運営委員会 2015 年 3 月 13 日



## 2014 年度 ジェンダーセンター運営委員

### ●委員長兼センター長

細野 はるみ

### ●副委員長兼副センター長

牛尾 奈緒美

### ●学部内委員

山口 生史

武田 政明

鈴木 健人

宮本 真也

田中 洋美

内藤 まりこ

### ●学部外委員

高峰 修（政治経済学部）

水戸部 由枝（政治経済学部）

### ●学外委員

出口 剛司（東京大学）



## 編集後記

子育て、家事について不得意なことがあったときに、それを恥とってしまう。それはきっと私自身が、「男だからできないと思われたくない」からだろう。この屈折した気持ちには、「男としての」アイデンティティが働いている、それが一見してポジティブなものであったとしても。

それほどまでに、人間は男という入れ物と、女という入れ物に自他を収めたいようで、「単なる人」という次元にまで話を落として、「男らしさ」や「女らしさ」を越えて行こうとする方向へはなかなか行きにくい。「ジェンダーフリー」という言葉の意味がまったく分からない人びとがいるのも無理はない。もちろん、こうした惰性と非寛容さが、この言葉を公的空間から排除する理由にはならない。この男／女の二元論は困ったもので、女性としてのアイデンティティは伝統的、権威主義的なかたちで別の女性、特に若い女性への蔑視や偏見につながることもある。電車内へのベビーカー持ち込みや、乳児を持つ女性の搾乳や授乳の空間、古くは電車内の女性の化粧をめぐる、ややメディアに作られたようにも見える論争にも、このことは作用しているだろう。そんなことは、男性が女性についてこれまで取ってきた態度に顕著だろうと思う方々には、「その通り!」と言うしかない。「男性がこうあるべきで、女性がこうあるべきである」というルールが多くは、男性に都合よく作られていて、そのルールに無意識に女性がしたがうと、結局は主体の性別はどちらであれ、女性への強制となりえる。「女らしさ」「母親らしさ」とは、場合によっては男性的価値を間接的なかたちで肯定するように作られている。男女が共同で社会に関わることは重要であるし、そこで平等や自由の原理が実現することはもちろんのこと好ましい。しかし、この表現の解像度は、現在ではもう低いと言わざるをえない。もはや私たちが生きる世界は、男／女の二分法はとらえきれないほど、差異に満ちあふれている。ジェンダーセンターがめざすのは、男／女の二分法によって割り振られたしまった「私らしさの要素」を、差異に敏感なかたちで分光する、そうしたプリズムの役割を担うことだろう。

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの『2014年度年次報告書』をお届けします。ここに報告されているシンポジウム、研究会、特別講演会、フォーラムに参加し、協力して下さったすべてのみなさんに、心より感謝いたします。

ジェンダーセンター運営委員 宮本真也

公民権運動で知られるマーティン・ルーサー・キング氏は、差別や不平等に縛られた状況に前例のない結果をもたらす「自由のための一撃」を意識しながら演説したというエピソードを耳にした。小さな一撃が少しずつ積み重ねられて、やがて世の中の流れを変えていった。不自由さや生きづらい状況を変えていく「自由のための一撃」にはいろいろな形があり得る。今年度のジェンダーセンターは、画期的な女子教育の歩みを収めた記録映像の上映、海外の著名な社会学者を招いての講演会、少女の成長をテーマにした映画の上映会、学生たちによる大ヒット映画の研究発表会など例年になく形式のイベントを開催して、多くの人に楽しんでいただいた。参加して下さった方々にささやかかながらも「自由のための一撃」がもたらされていたらうれしく思う。

ジェンダーセンター事務局 岩崎美香





ジェンダーセンター年次報告書 2014



## ジェンダーセンター年次報告書 (2014 年度)

- 
- 2015 年 3 月 31 日発行
  - 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター